

第121話 パリッシュのモデルに学ぶ(1)

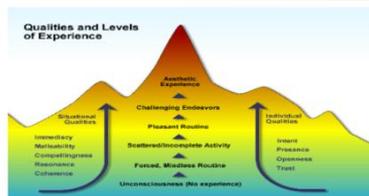
学習経験の質を高められるのは
どういう学習者か？

図1 経験レベルを左右する要因(Parrish & Wilson)

- **パリッシュ:「ID美学の第一原理」提唱者** まだお会いしたことがない研究者
([ランチョン第18回](#)(2009/6/10)で紹介: JSISE28(2)に[解説論文](#)あり)
- **学習経験の質には段階がある** ([JSISE](#)で発表済: SCCの省察に利用している)
 - 無経験 → 機械的な繰り返し → バラバラな活動 → 心地よい繰り返し → 挑戦的な企て → 美学的経験 と質が高まっていく
- **学習経験の質は** 学習環境(外的要因) と **学習者(内的要因)** に依存する 注: 今日の発表では学習者要因に焦点化します
- **学習者要因には、** 意図 (Intent) ・ プレゼンス ・ 開放性 (Openness) ・ 信頼 (Trust) の4つがある。そう考える 意義 は？
- **背景: 積極的関与者としての学習者を位置づける動き** これについてもそのうちお話ししよう。Upon Request.
e.g., [ibstpiのオンライン学習者コンピテンシー\(2012\)](#) 未公開
- **続編(2): 学習経験の質を高められるのはどういう 学習環境 か？**

意図 (Intent)

Parrish, P., & Wilson, B. G. (2008). A design and research framework for learning experience. A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orlando, FL. Available online at 2008 Annual Proceedings Volume #2, Selected Research and Development Papers Sponsored by the Research and Theory Division, http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008/08_18.pdf

- **個人が持ち込む目的や興味に留まらず、態度・価値・期待・信念・嗜好・自らが置かれていると思う立場の認識などを含む広範なもの。**
哲学でいう指向性 (intentionality) で心理学研究の課題全般を含む。
インストラクタやID者が持ち込む意図と絡んで経験を左右するが、自らの意図を意識した場合には経験の質が高まる可能性が増す。

プレゼンス (Presence)

Parrish, P., & Wilson, B. G. (2008). A design and research framework for learning experience. A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orolando, FL. Available online at 2008 Annual Proceedings Volume #2, Selected Research and Development Papers Sponsored by the Research and Theory Division, http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008I/08_18.pdf

- 心身ともに「そこにいることbeing-there」で状況の理解につながる関与が始まるが、他者を助ける共感を伴い積極的に貢献しようとする「ともにいることbeing-with」で対話や異なる視座からの学びを可能にし、さらにあるがままの自分の思いや感情をさらけ出して「らしくあることbeing-one's-self」が素直に現状を認めて学びの契機につながる(そうでないと自分が学ぶ必要があることを認めずにいることになる)。

開放性 (Openness)

Parrish, P., & Wilson, B. G. (2008). A design and research framework for learning experience. A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orolando, FL. Available online at 2008 Annual Proceedings Volume #2, Selected Research and Development Papers Sponsored by the Research and Theory Division, http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008I/08_18.pdf

- 与えられるままに受け入れるという意味ではなく、個人としての考え方やあり方は守りつつも変化を拒まないという気持ち。

開放性とは弱さではなく強さを示すものであり、状況にのめりこんで行くためには必須の要素となる。



信頼 (Trust)

Parrish, P., & Wilson, B. G. (2008). A design and research framework for learning experience. A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orolando, FL. Available online at 2008 Annual Proceedings Volume #2, Selected Research and Development Papers Sponsored by the Research and Theory Division, http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008I/08_18.pdf

- **良い結果が生まれることを信頼し、疑念を保留し、辛抱強く、直近の報酬がなくても関与し続けられること。**
何らかの解決策を求める状況の中でも好転する可能性を信頼し、期待感を持って精神的・感情的にコミットできること。
そして、期待通りに行かなかったときには寛容の心で接し、状況が修復できることを信頼すること。

学習者要因を知ってどうする？

鈴木克明(2009)「学習経験の質を左右する要因についてのモデル」教育システム情報学会研究報告, 24(4), 74-77. [Available online] <http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/?p=1914>

- 既存の学習活動の質が低いレベルに終始している場合に、その原因の一端を学習者個人の属性に起因させる
 - 「あの学習者たちが相手では、こちらがいくら頑張っても限界があるよね」という諦め、一種の責任転嫁
- 予め「こういう人たち」に入学してもらえればあとが楽になる
 - 教育機関への志願者の選抜に際して有力な情報となる
- 「学習者の協力がなければ良い学習経験は実現しないのだから、どういう協力を求めるかを予め整理して伝えて(あるいは訓練して)おく」ということに応用可能
 - 入学後の学習を成功させるために求められる要件として提示しておく
 - 初期段階でどういう訓練をしていくべきかを考える上で参考になる